
少しの卒業

一条 灯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少しの卒業

【Nコード】

N5243Q

【作者名】

一条 灯夜

【あらすじ】

同じ部活の先輩を慕う主人公。でも、それが叶わないことをはつきりと彼は自覚している。そんな彼の側にいる幼馴染。先輩の卒業がもたらした、変化の物語り。

*2011/6/26エピソード割り込み挿入（第六章）

第一章 桜の顛末（前書き）

昔の作品の大幅加筆版です。

アルファポリス様主催の『第四回恋愛小説大賞』エントリー中です。

第一章 桜の顛末

見込みが無いのは、解っているんだ。貴女の隣には、別の人が居るのだから。

だから、せめて想いの決着だけは付けよう、……そう決めたのにな。

結局僕は、教室の机からぼんやりと外を眺めているだけ。外に広がる景色には、卒業を惜しむ在校生と卒業生が、ずらりと校門までの短い道を埋め尽くしていた。

春の陽気がポカポカと暖かく、柔らかな日差しにだんだんと瞼が重くなっていく。

なけなしの覚悟なんて、とうの昔に消え失せていた。あからさまなのはイヤで、そんなえりごのみをしていたせいか、チャンスにも見放された。そもそも、卒業式当日に二人つきりになれるチャンスなんて無かったんだ。それも、偶然を装ってなんて。

傷心に浸りながらも、最後のガードを外して眠ってしまおうか？
何て考えていた。

多分、きつと、それが一番良いんだ。

そう結論付けた気だるい怠惰な時間は、教室の引き戸を勢い良く開ける音に崩される。

そして、つかつかと靴音も勇ましく歩み寄ってくる人影。標準よりも高い身長と、肩の少し下までの真っ黒な髪、意志の強さを証明するような大きな瞳。への字に曲げられた口が、心理状態を如実に表している。

「行くよ！」

そんな風に一声掛けて手を掴み、引き摺りそうな勢いで僕を引っ張る七海。

「何処に？」

掴まれていた掌を、振り離して立ち上がる僕。

「自分で告白して決着つけるって言ったんでしょうが！ 最後までいい、ちゃんとふられる」

七海は怖いくらいの剣幕で捲くし立ててから、僕に背を向けた。

「うわ、酷い言い草」

茶化すように言って、ポケットに両手をつ突っ込む僕。

「こういうことは、はっきり言っただろうが良いの。特にへたれのアントは、こうでもしないとすぐに諦めるんだから」

下手な女子なら惚れてしまいそうな男らしさで、かっこよく言った七海。

確かにその通りなんだけど、もう少しオブラートに言っただけ欲しいと思うのはわがままなんだろうか。それに、人の恋路に首を突っ込んで欲しくないと思うのも。

「朋美先輩部室に寄ってから帰るって言ってたから、今なら人の少ない校舎で話せるチャンスだって」

そんな僕の頭の中なんて気にも留めずに、まるで自分の事のように弾んだ声で戦意を煽る七海。

「ふられるのが分かっていて、チャンスも何も無いと思う」

そっぽを向いて答える、あくまで冷静な僕。そもそも、朝から、そのチャンスってヤツには、振り回されるだけでモノに出来ていないのに。

「ええい、ここまで来たらうだうだ言うな！」

結局、七海に強引に引つ張られてしまっただけ。

階段を一つ上がる。

過ぎていくプレート、美術室、美術準備室。

今日の校舎は、卒業式の独特の匂いがする。シナモンに近いような、くど過ぎないけどまとわり付く香り。保護者の香水なのか、教師の化粧なのか、今日しか出さない備品がそうなのか、はたまたそれら全部を混ぜるとこんな匂いになるのか。……他の誰も気にしていないようなので、誰にも言っただけで直ぐに消えるこの匂いは

好きじゃない。

でも、そんなのがやけに気になるのも、中途半端な期待と不安のせいだ。だから、無駄に七海の背中や、見慣れた廊下の風景や、窓の向こうの空を気にしてしまう。

焦れながら音楽室を通り過ぎ、そして辿り着いたのは音楽準備室。ちょうどその時、朋美先輩がヴァイオリンケースを抱えてドアから出てきた。

逆光に目を細めながらも、僕と七海に気付いて微笑みかける朋美先輩。長さは七海とそう変わらない髪なのに、毛先がやや内巻きなせいか印象はずっと柔らかい。

「卒業おめでとうございます朋美先輩、高校へ行っても、たまには部活見に来てくださいね」

七海が、にこやかに話し掛ける。

「そんな邪魔になりそうな事しません」

朋美先輩は笑顔で答えて、七海とクスクス笑い合った。

「それじゃ、私は一足先に外へ出ていますね。あ！　そうそう、荷物にしかありませんが卒業祝いです」

七海は喋りながら、半歩後ろに下がっていた僕の肩を掴んで前に押し出す。

「そんな事言ったら可哀想よ」

「僕的には、可哀想って言われる方がへこみます」

少しムツとしてぶっきらぼうに言った僕、苦笑いする朋美先輩。

その中、張本人である七海は、『頑張りなさいな』と目配せして去っていった。

「朋美先輩、卒業おめでとうございます」

微妙な空気を払拭するために、真面目な顔を作って、僕はそう告げた。

「うん、ありがとう」

右手を差し出して、『持ちましようか？』と目で訴えると、彼女はやっぱりと首を横に振り、そして急にハッとした表情になった。

「あ！ 教室に鞆置いて来ちゃったんだ」

「お供します」

僕は、少し笑みを浮かべて、横に並んで歩き出す。二人で話す言葉は少なかったけど、取り巻く空気が多くのモノを伝えていた。

少しだけ開いた窓から入る風が、彼女の長い黒髪を揺らす。

「もう風も、冷たくない。受験に追われて、気がつくのが遅れてたのかな」

ゆっくりと話す朋美先輩の、微笑を湛えた横顔を見てみると、この気持ちなんかとづくにばれているんじゃないかって気さえする。だからなのかな、告白しても何も変わらないって確信がある。ちょっとおでこを小突かれて、それから多分いつもの二人。そのいつもの二人に戻れてしまう辛さを消すための、今日だったんだけど……。

「桜はまだですから、春には早いですよ」

その時、僕の声を割って、軽快なリズムが響いた。朋美先輩が、スカートのポケットから携帯を取り出し、メールを確認している。

「彼氏さんですか？」

「うん、下駄箱の前の広場にいるのだけど、すっかり待たせちゃった」

足を速める朋美先輩に合わせて、ペースを上げる。半歩遅れて続く僕の視線は、前を見つめる朋美先輩の視線と重なりはしない。

やっぱり、この言葉は告げないでおこう。

もう少しだけ、この想いを抱きしめていたいから。

共有出来はしない、この想いを。

急ぎ足で鞆を持って、教室を後にする。小さい校舎、少し歩けば下駄箱はもう目の前。さすがにそこまで付いていく気はしなくて、上手く表情が作れていない気がしたけど、気持ちだけ笑みを浮かべてから、僕は言葉を選んだ。

「それじゃ朋美先輩、さよなら」

朋美先輩は、そう言った僕の額をツイと人差し指で押して、にっこり笑った。

「挨拶が違うでしょ？」

そして朋美先輩はそのまま一歩だけ下がって、僕と向かい合う。

「またね」

優しい笑顔で呟く様に告げた彼女は、手を振ってから下駄箱に向かって歩き去ってしまった。

そうして一人残された僕は、曖昧な想いを抱えたまま教室に戻り、また空を見上げた。すると、その肩をポンと叩かれ、振り向いた頬を指でつつかれる。

「せめて告白するはずじゃなかったっけ？ 協力しがいが無いなあ」

七海が悪戯っぽく言ってから、声のトーンを落として続ける。

「良かったの？」

「良しさ、折角の春だし……それに」

「それに？」

「初恋なんだから」

桜はまだ蕾だけど、晴れ渡った空は暖かく、春の日差しが教室の中にも降り注いでいた。

「そっか」

とても複雑な表情を浮かべた七海は、そう言いながら僕に背を向けて窓に駆け寄る。

「ほろ苦いなー！」

凜とした七海の声が、閑散とした校舎に響いた。

「恥ずい子」

「失恋したら叫ぶもんだぞー！」

どこかさっぱりとした顔で、七海が振り返る。

「単純で良いね」

「どこが！ こう見えても、お姉さんには苦勞が絶えないわけよ」

腰に手をあてて、身を乗り出して言った七海。

「同い年のくせに」

「精神年齢的なもので、だよ」

人差し指が、お互いの目の前で交錯する。

だけど、七海はすぐにその指先と勢いを引っ込めて、真面目な顔になった。

「ホントにいいの？ 思いの丈を叫ばなくて」

「いいんだよ。内に秘めてたら、いつか良い曲が浮かびそうな気がするから」

釈然としない顔の七海をそのままに、僕は少し笑った。

好きになった人のことなんて、一生忘れられないんだから。……
両想いだろうと、片思いだろうと。それなら、無理に整理なんてつけずに、そのまま、その心の形のまま、あればいいと思った。

第二章 梢の回想

微妙に寝苦しい春の夜。桜が咲いた最初の夜で、満月の少し手前の月が夜を明るく照らしているのが、窓の向こうに見える。

もう何度目かも分からない寝返りを打ちながらも、一向に訪れない眠気。

頭に浮かぶのは、朋美先輩のこと。卒業式から一週間たった今、どうしてこんなにも思い起こされるんだろう？

いや、多分、今日だからだと思う。一日二日で、もう会えないんだって、実感するのは難しいから。

泣けるような自分じゃないのは分かってる。

だからこそ、今のこの気持ちをどうすればいいのか分からなかった。

朋美先輩は、特別に人と違っているところなんて無かったと思う。でも、僕にとつての特別になるのに、たいした時間が掛からなかったとも。欠けたパズルのピースが、当たり前のようにその空白を埋めて一枚の絵が完成するように、そこに収まるのがまるで当然だとも言つように、僕の中学生活の中心に収まっていた。

今も心を震わす、去年の記憶。

秋の終わりの土曜日の夜。午後六時から町の文化ホールで、毎年行っている定期演奏会。緊張する一年とも、談笑する二年とも、思い思いに過ごす三年とも距離を置いて、僕はピアノの前に座る。僕の場合は担当がピアノだからか、吹奏学部の演奏以外にも、合唱部の音取りやいくつかの曲の伴奏を頼まれている。

特にそれに何か思うところはない。そういうものだと思うだけで、気負うものもないし、面倒だとも思わない。出来ることをやるだけ。冷めている？ そんなのは、物心付いたときから自覚している。

「いよつ千両役者、準備は良いかな？」

吹奏楽部の部長が、馴れ馴れしくそう言った。横には合唱部の部長も居たけど、こちらは普段、僕とあまり親しくしていないせいか、大人しそくに頭を下げて挨拶だけをした。

「問題なし」

隣り合う白鍵を三つ弾いて、冷静に答える僕。

冷たいヤツ、と、苦笑いの部長たちは、それぞれの所定の位置へと向かって、それからすぐに幕が開いた。

予定されたスケジュール通りに進んでいく演奏会。舞台袖間近のピアノが僕の席で、ライトが消える度に入れ替わる吹奏楽部と合唱部を見ながら、僕だけがそこに居続ける。手伝わなくても良い合唱部の曲もあるけど、その度に出たり入ったりも出来ないから。

ホールの客入りは、一応満員だけど、基本的にはクラスメイトにOBに保護者って言うのは正直微妙。身内にほめられても、井の中の蛙な感じがどうしてもしてしまつて。

演奏に集中はしていたと思う。

それでも、視線は朋美先輩を探してしまう。

朋美先輩の演奏は、特別に上手いわけじゃない。事実、ヴァイオリンのソロは別の先輩が受け持っていた。

どうしてなんだろうな、という考えはいつも浮かんでしまつけど、それはいつだって自分の感情を肯定しかしてくれなかった。

好きになることにきっかけはあつても、理由は無い。

最後に合唱部と吹奏楽部全員で歌つて、定期演奏会を締めくくつた。

日はもつとつぷりと暮れていて、普段の部活じゃ絶対にありえない時間になっている。

大きな楽器は、OBや先生、保護者の車で学校に運んでもらつて、

細々した物を持って、学校までの一キロにやや足りないくらいの道を歩いていく。

ひとまとまりになりはしないけど、各所に小さなコミュニケーションを形成して、それぞれのペースでの凱旋行進。遅々として進まないグループもあれば、僕のように普段のペースで中間層を形成する人間もいたし、何を考えているのか競争して先頭を争う連中もいる。

線路を渡って、道のりの半分くらいに来たとき、急に後ろの方から歌声が聞こえてきた。

視線を向けたのは一瞬で、僕はすぐに前を向く。

まあ、こういう時の風物詩だろう。

ただ、いつもと違っていているのは、急に背後から首に腕を回されたことだった。

どこの馬鹿がからんできたのか、と、睨み付けるつもりで視線をめぐらすと、僕の首から肩の方に腕を移動させた朋美先輩がいた。

そのあんまりな登場にびっくりしすぎた僕は、さっきまでの腹立たしいのさえ忘れて、きつと間の抜けた顔になっていたんだと思う。「こういう場面では、一緒に歌うの！ さあ」

一瞬、至近距離で見つめあった後、朋美先輩は小さく笑って視線を学校の方へと向けて言った。

僕の方はといえば、何気なく肩に回された腕を思いつきり意識してしまつて、顔を赤くして縮こまっているばかりだった。我ながら、こういう場面でこそ、普段の冷静な皮肉屋の自分になれば良いのにとと思う。そうしたら、もっと上手く振舞えるのに。

歌っているのは、合唱部が最後の方に歌ったJ・popで、いかどこかで聞いたことがある、そんな一曲だった。有名なしいけど、いつリリースされたのか僕は知らない。正しいタイトルも正直おぼろげで、歌詞もつられて歌っているだけで。

本当に楽しそうな顔をして歌う朋美先輩の顔が、隣にある。澄んだ歌声が、聞こえる。僕と肩を組んでいるせいで、少し乱れた足並み。自分の鼓動が、体中に響いている。

意識しているのは、多分、僕だけなのだろう。
でも、それでも、良いと思った。

朋美先輩の口ずさむメロディーを追うように、僕もゆっくりと歌い始める。間違いながら、詰まりながら、それでもめげずに。

その時、もう一度だけ朋美先輩と目が合った。

隣り合う先輩と想いが通じているような、鼓動が重なるような、そんな気がして胸が熱くなる。

多くを望んでいるわけじゃない。

想いが叶わないってことは、もう知っている。
でも、それでも……。

校舎に着いた時、もう先輩は僕の隣にはいなかった。

それが、多分、僕と先輩の心が一番近付いた瞬間だったと思う。
心を揺さぶるような、劇的な何かが起こったことなんて無い。

特別仲良くしたって訳じゃなかった。

長く一緒に過ごせたわけじゃなかった。

それでも、どうしようもなく好きだった。

その感情がどこから来るのかも、どうしてそうなのかも分からずに。
でも、理由も無いただ好きだって感情に、振り回されていた。

きつと、今でも。

第三章 新緑の緑

音楽室から見える、大きな桜の木はもう緑の新緑に染まり始めている。

ようやく桜が咲いたのは五日前だったけど、昨日が雨だったから、桜の枝に花弁の一つも残さずに、全てを洗い流していた。

だから、日曜に部活で学校に来た時には、すべてが一新したように見えた。

別に、顧問とか他の部員を待つ必要もなかったから、部室に寄らずに音楽室へ直行して、机の上に鞆を放って、ピアノの前に座る。

特に、今、練習が必要な曲はない。

部活勧誘とか入学式なら、お決まりのをちよつと弾くだけだし。

まるで記号のように並んだ、黒鍵と白鍵、そのなかを適当に指先を遊ばせる。ぶつかった指先が、一つ一つ音を導き出す。それに何か意味があるわけじゃない。ぼーっと過ごす時の癖みたいなものだ。

手持無沙汰な時間に、小さく溜息をついた。

そこからは、一息だった。

溜息が消えないうちに、僕は上体を正して、鍵盤に指を叩きつけた。

理由はない、だた、難しいのを弾きたかっただけ。深く、暗く、強く、激しく。指だけじゃない、腕でも足りない、肩のさらに奥、腰から全身を掛けてメロディを弾きたす。

ミスした瞬間に、全部がはじけて消えるような感覚。

難しい部分を上手く切り抜けるたびに、それが積み重なる程に、心臓がギュツと縮んでそれでもなお鼓動が早まって、なんだか無意識にうすら笑いが浮かぶ。

そんな時、ゆっくりと音を立てないように、慎重に開けられたド

ア。顔を覗かせたのは、七海だった。

邪魔になったわけじゃないけど、なんだか、それが少し場の空気を変えた。悪くない、テンションは変わらない。でも、さっきまでとは違う。

だからかもしれない、きりが良いところで、演奏を打ち切ったのは。

「部活紹介の曲じゃないでしょ？」

七海が、小さく拍手しながら言った。

「シヨパン」

指先の小さな震えの余韻を感じながら、僕は答える。出来は……自分の演奏は自分で評価すると、過大か過小のどっちかにしかない。

でも、まあ、満足した。

「好きなんだ」

その言葉を聞いて、七海がビクツと身を強張らせたのが分かった。まあ、唐突に言ったのは、そういう狙いもあってなんだけど。

いつもとは違う不安そうな表情が、目鼻立ちのはっきりとした七海の顔に浮かぶ。普段が凛々しい印象が強い七海だから、そんな仕草はなんだか新鮮だ。

少しだけ僕は笑って「作品も、人物的な意味でも」と、付け加える。

七海の不満げな視線と顔。それを、満足そうに見つめた僕。

「故郷で起こった革命と、その弾圧の報を聞いて生まれた曲とかも言われているけど……まあ、どうなんだろうね」

ポンと、適当な白鍵を一つ叩く。

迷い込んだ『ソ』が、音楽室に反響した。

「あんたって、ホント不思議だよな」

その言葉通りの、心底不思議そうな顔で言った七海。

「は？」

「その絶妙に微妙なテンションの波が」

真顔の七海、重なった視線の先、大きな瞳は深い色で、吸い込まれそうだった。

しばらく見つめてから、僕は視線を逸らす。

「油売ってないで、もう自分のパートに戻りなよ。学校の勉強は僕より上だけど、音楽のセンスは高くないんだし」

照れ隠しつてわけじゃないけど、口をついて出てくるのはそんな意地悪な台詞。

「しつづれいしちゃう！へたれの癖に、皮肉屋なんだから！」

怒鳴ってから、思いつき膨れっ面をした七海。もう、知らないとしても言うように、僕と顔を合わせないようにして、ドアへと向かって大股で歩いていく。

肩を怒らせて部屋を出た七海と入れ違いで、新部長が入って来た。「あれは、ちよっとヒドイと思うな」

そう言った片手には、クラリネットの入ったケース。

基本的には、部室前の廊下でみんな練習している。理由とかは分からない、というか、ただの伝統で理由なんてないのかもしれないけど。まあ、音楽室は、よく合唱部とぶつかるからなのかなって思う。だから、合唱部がいなくても、なんとなく寄り付かないのかも。ここにしか楽器の無い、僕を除いて。

「ああ、何？」

今、気付いたという風に、わざとらしくとぼけてみせる。

「そこまで鈍感って訳じゃないと思うんだけど？」

非難を込められた言葉。

「分かってるから、どうだっていうのさ？」

それに負けじと、僕も鋭さをそのまま顔に出して言った。すると、諦めたような部長の顔。

「朋美先輩もそうだったのかもよ？」

胸に刺さる一言。

秘密なんてものは、どんなに上手く隠したつもりでも、どこからか漏れてしまう。多分、朋美先輩も、誰かからは聞いていたんだと

思う。あるいは、この新部長みたいなお節介から。

「尚更さ」

だから僕は、出来るだけ気にしていない風を装って、そう答えた。
「ヒネクレモノ」

呆れたような声を残して、新部長も音楽室を出て行って、僕だけがまた取り残される。

鍵盤を適当に指で弾きながら、どうしても朋美先輩のことが頭に浮かぶ。

いつか振り向いてくれるんじゃないかって思って、二年の時間だけが無為に過ぎていったのに、それでもまだ、微かな期待が胸にある。どこかで再会した時に、ちょうどその時先輩が独り身で、想いが通じるんじゃないかって。

ありえないって思う。それでも、そういう奇跡が起こってほしいって思う僕が居る。

我ながら馬鹿だなんて思いながら、それでも何のやる気も湧いてこなくて、適当に練習をしているフリだけをしていた。

「帰るよー！」

元気良く飛び込んできたのは、やっぱり七海。部活前の掛け合いなんて、もうまるで気にしていない態度で。その男らしい、さっぱりした性格が、羨ましくもあり、疎ましくもある。

大した物の入っていない薄っぺらな鞆を肩に掛けて、七海の背中について音楽室を出た僕。

特に会話もなく、下駄箱に向かって歩いていく僕と七海。でも、これは、別にいつものことだ。七海が何か喋りたいとき以外は、大体、言葉少なく並んで歩く。僕の方から話しかけることは、あまりない。会話自体が、あまり得意じゃないし、元々僕は多弁な方じゃないから。

「まだ……うじうじしてんの？」

隣を歩く七海が、僕を見ないで言った。独り言のようにも聞こえるけど、人の少ない校舎に大きく響いて、無視が出来ない。

「何が？」

素直に答えるのも面白くなって、意図に気付かない振りをして言った僕。

「ほらぁ。そういう態度」

今度は、僕の前に回りこんで、目を覗き込みながら言った七海。素直に七海の顔を見つめ返したりなんてしたら、心の奥までその大きな瞳で見透かされそうな気がしたから、顔を逸らした僕。

小さく溜息をつく気配がした。

そうして、それから、七海はまた僕の横に並ぶ。その瞬間に「振られとけばよかったんだよ。だから」と、僕に耳打ちして。

「大きなお世話」

今度は僕が、溜息混じりに言った。

「心配してるの、青春を謳歌できないクラスメイトを」

「それが大きなお世話なんだって、こういう経験も時間が経てば良い思い出だよ」

七海は、納得した様子じゃとても無かったけど、それでも一応口を閉ざした。

ほんの少しずれた足音のリズム。

でも、僕と七海はそれ程変わらない。そもそも七海は女子としては背が高いほうで、やや小柄な僕と背丈がそう変わらないから、それに応じた歩幅のコンパスもほとんど同じ。

本当は感謝するべきなのかもしれない、ここまで親身になってくれていることに。

でも、それは無理な相談だと思う。

七海の隠しきれていない感情の欠片が、僕を素直にさせない。時折近くなる一步分の距離が、不意に触れられる七海の手が、向けられる視線が……。

上手く言えないけど、僕が好きな人を知っている七海がそういう感情を　意図してか無意識かは知らないけど、見せるのはフェアじゃないと思う。

なんて、朋美先輩にとっては僕がそんな位置に居たんだから、偉そうに言える権利なんて本当は無いんだけど。

でも、そんなものじゃないか。恋愛なんて。

第四章 古枝の誓

春休みの部活は、だらだらと過ごすのに最適な空間だと思う。顧問は多分変わらないんだろうけど、現在は正式な命令系統のトップに居るわけじゃないし。誰もが三年という上の押さえが外れた、無責任な自由を謳歌している。

僕はといえば、相変わらず音楽室で一人、ピアノの前で佇んでいるんだけど。

でも、まあ、特別教室には、きっとモラトリウムが似合うんだろう。

三階建ての校舎の最上階に位置する、音楽室の窓の向こう。僕たちの街は、春霞の中で景色を一層柔らかく見せている。

「酸いも甘いも分かり合う幼馴染って、普通付き合うものじゃないの?」

どこかで聞いたような一言を投げかけたのは、本人的には格好つけたつもりで音楽室に現れた新部長。なぜか彼女には、大人びた仕草が驚くほど似合わない。容姿は普通なのに。

「七海が何か言ったの?」

小さく溜息をついて、不機嫌……よりもむしろ呆れるような気持ちで言った僕。

「えへ」

新部長は驚いた顔をして、それから決まりが悪そうに笑った。

「それに、言うほど幼馴染でもないよ。七海がこっちに来たのは小5の時だから、四年にちょっと足りないくらいだし」

今も覚えてる。七海が、同じ小学校に転校してきたのは五年になったばかりの四月のことだった。悔しいくらいに背の高い女子で当時の僕より四センチ背が高かったから、僕にとって最初の印象はすこぶる悪い。最初に僕より三つ前に並んだ七海を、今も覚えているのはだからだ。あの頃は、今以上に背の順に並ばれることが

多かったからな。

「そーなの？ 七海の気に入り具合からして、物心付く前なイメージがあっただけ」

人事だからか、面白がってるのが彼女の顔に出ているせいで、なんだか面白くない。

「その辺の理由は、探ってくれても良いんじゃないか？」

軽く睨む様に、僕は新部長の方に向き直る。

僕と目が合って、パチパチと瞬きをした新部長。

「んー……七海も、しっかり者の様で抜けてたりするから、時々ぽろつと秘密を喋るけど、基本的にはガード固いからね」

下唇に人差し指を当てて、小首を傾げる新部長。

それを呆れた顔で見る僕。七海って案外人望が薄いのかも。側にいるのが性格がひねた僕で、相談相手が腹黒の新部長なんて。

「大概悪女だな、アンタも」

肩を竦めて言った瞬間、音楽室のドアが勢いよく開けられた。

僕も新部長も、いきなりの展開に身を強張らせながらも、ドアへと視線を向ける。ドアから顔を覗かせたのは、七海だった。噂をすれば何とやら、というには騒々しすぎる登場だ。

「あつれ〜？」

ドアを壊しそうな勢いで引き払った七海は、場違いな疑問符を浮かべている。

「というか、なんで音楽室に入った瞬間に疑問に思うことがあるんだ？」

「何が、あれなんだよ」

訝しむ様に言った僕。

「盗らないよ？ こんなの」

僕を指差して、へらへら笑って言った新部長。

途端、朱美の表情が目まぐるしく変わった。反論しようと口を開いたり、考え込んだり、頬を赤くしたり。分かりやすい子だよな、と思う。将来が不安になるくらい。良かれ悪しかれ考えるより行動

するタイプで、さっぱりした　大雑把な所もあつて、その癖変な所は繊細で。

「こんなので悪かったな」

七海に向かつて、思いつきり不機嫌に僕は言った。

「え？　あの……ゴメンナサイ」

困惑した顔のまま、それでも気圧されたように頭を下げる七海。

「まあ、いいけど」

素っ気無く言った僕。

「それじゃ、練習に戻ろつか？　七海」

新部長が七海の肩を掴んで、ドアの方へと半回転させる。

「うん」

うなだれる様に頷く七海。新部長に背中を押されながら、今まさに音楽室を出て行くこうとしている。引きとめようかとも一瞬思ったけど、いずれにしろ面倒なことになるだろうと思ったので、そのまま日本人的事なかれ主義で温かく見守る。

「って、ちよつと待って。騙されてるよ、私！」

ドアの敷居を跨ぐ前に、七海が気づいて吼えた。

「ちっ」

新部長は、舌打ちが出来ないのか口で言った。

「今、『ちっ』って言った！」

七海が、それを見咎め騒ぎ立てる。

「そもそも、何しに来たのさ」

馬鹿な二人の掛け合いを、一步外から眺めて言った僕。

じゃれている二人は、あからさまにしらけた視線で空気読めよと訴えていたけど、当然のごとく僕はそれを無視する。

「いや、その……ちゃんと部活してるかなーって」

最初はまごまごと口を開いた七海だったけど、『なー』にアクセントを置いて、猫が鳴くように子供っぽく言った。微妙に目を合わせずに、口を尖らせている。ちよつと反省しながらも、拗ねている時の七海の顔だ。

「あ！ それに、部長を探してたんだよ。ほら、こんな所で油を売ってないで、皆をちゃんとまとめる！」

自分で招いた微妙な空気を払拭するように、ビシッと新部長を指差して決めた七海。

七海の人差し指に射抜かれても、どっかの童話に出てくる猫みたいなニヤニヤ笑いの新部長。

「どうかした？」

七海が、たじろぎながら訊いた。

「いや、良く言うなーと、思っで」

一層顔をニヤつかせながら、新部長は七海を肘でつつく。

「違うんだよ！ 用事があったのー！」

顔をくしゃくしゃにして叫んだ七海。

「じゃあ、用事を持って帰れ」

ずっと嫌な感じの微笑ましい視線を送ってくる七海の用事を指差して、僕は言った。

「ラジャー！」

茶目つ気たつぷりに敬礼して、七海が新部長の腕を掴んで引きずっていく。

「私に感謝しろよ」

七海に引きずられながらも、不遜な態度で言い放つ新部長。

「用事が喋るなよ」

苦笑いで言った僕。

ドアが七海の後ろ手で閉められると、再び静寂が訪れた。

最近、ちょっと露骨だよなと、思う。

昔はもつと分かりにくかったし、ふとした瞬間にあれ？ と、思うようなことがあっても、すぐに自惚れだったかなと、思わせられるような態度だった。

朋美先輩が居なくなっただからといって、好きの気持ちがりセットされたわけじゃないのにな。

好意を向けられるのなら、本当に想うたった一人から選ばれたかった。

そうじゃなかったら、誰にも想われなくても良いと思ってた。

第五章 桜の記憶

「そういえば、どうして朋美先輩が好きだったの？」

暖かいよりは暑いくらいに感じる、春休みの部活の帰り道。半歩後ろを歩いていた七海が、不意に問いかけた。

一瞬足を止めたけれども、振り返らずに僕はゆっくりとまた歩き始める。歩道の上の空を覆う電線。ちらほらと浮かぶ千切れ雲。午前中だけの部活だったから、太陽が高くから照らしている。

「また、答え難いことを聞くね、七海も」

通り過ぎる風景と風に言葉を紛らすように、言った僕。何でもない風を装って言ったのは、七海が引きさがるかな？ という微かな期待から。七海が一步踏み出す瞬間に、その氣勢を削いだり、気付かないふりをするのが板についてきた。

想いを伝えるなんて勇気の要ることは、相手の協力無しには成立しない。

だから、きっと僕は。

「いや、だって、そういうの話してくれたこと無かったし」

拗ねるように、僕の踵を爪先で蹴る七海。

そういえば、コイツが僕の想い人を知っているのは、僕が教えたからじゃなくて勝手に気付いて否定し切れなくてばれたんだよな。

諦めて振り返る僕。思ったよりも近くに居た七海が、僕にぶつかりかけて止まる。焦点を一瞬失った視界に入る紺色のブレザーに、丸襟のブラウス、首元のスカーフはまだ二年色の青のまま。ほんの僅かに視線を下げた僕と、微かに上を見上げる七海。正面からじつと七海の目を見ると、好奇心一杯のキラキラした嫌な輝きがあった。「ぜったいに教えない」

わざとらしく顔をしかめて、ちよつと七海に顔を近付けて言った僕。心の奥では白けてる。でも、冗談めかして言う方が、空気がそっちに向かないことを知っているから。

そんな僕に、呆れたような顔をして肩を竦める七海。

「またアンタはそうなの？ いけないと思うなー、お姉さんは。そういう秘密主義的なところ」

七海は、僕に合わせたのか、ふざけた調子で頬を膨らませてみせた。

「あー、あー……今ので、言う気、完全に無くなった」

七海に背中を向けて、歩きはじめる僕。

「ほーら、すぐ拗ねるし」

七海が、人差し指で俺の頬をつつく。ひんやりとした細い指の感触。ふざける仕草に隠した七海の表情は、どこか思い詰めているように……。うで……。

だから一瞬動きを止めてから、裏拳風に左手を振って七海の指を遠ざける。

「触んな」

冷めた声と顔の僕。

少しだけ微妙な空気になって、僕達はまた友達の間合いで歩き始めた。

でも、そんな空気が払拭される前に口を開く七海。

「綺麗だったもんね、朋美先輩」

確かにそう思う。でも、今、七海がそんなことを言っているのを聞くとイライラした。ただ、容姿が綺麗というだけの理由で、僕が朋美先輩に惚れたと思われるのが癪だったのかもしれない。生憎、そんな軽薄さんなんて持ち合わせていないから。

だから、僕は無視して歩き続ける。

「朋美先輩みたいな、ちょっとふわふわした感じの人が好きなの？」
でも、僕が無視しても、七海は一人で語り続ける。

ふわふわ？ 確かに、内巻きの柔らかそうな髪に、童顔……とも言い切れないけど、柔らかそうな頬に、少し垂れた目はそういう印象を与えるな。

でも、そう考えると、引き締まった感じの七海とは対照的だと思

う。堅そうなストレートヘアに、引き締まった頬、くっきりとした目鼻立ち。七海の顔は、どこか硬質な感じがする。

「好きなタイプ、ねえ」

多少の不機嫌のまま、空に向かって呟いた僕。

「なにかあるでしょ？　こだわりのポイントが」

僕の前に回り込んで、七海が指差す。

七海が進路を遮ったせいで、僕の足も止まって視線が交差する。

「そういうの、良く分からないな。好きなタイプって言われたって、こういう人を好きになるって決めてるわけじゃないし、惚れた後からしかそういうことは言えないよ」

取って付けた笑顔で、僕は言った。

真っ直ぐにぶつかる視線をそのままに、強い気持ちで見つめ返す。何か言おうとした七海を遮って「これまで好きになった人から傾向を割り出すとしても無理」と、僕は突き放した。

不安に七海の瞳の奥が揺れて、微かに潤むのが分かった。

それでも、言葉を飲み込もうとは思わなかった。

風に消えないように、通り過ぎていく車の音に紛れないように、

僕ははつきりと告げる。

「まだ、一人しか好きになったことないからね」

第六章 同期の桜

一階の一番広い廊下には、各教室から引つ張り出されてきたイスが並び、吹奏楽部の手によって占拠・封鎖されていた。楽器の音色は、時々しか聞こえてこない。それも半分以上が調子を外した、お遊びだ。基本的には楽譜や楽器よりも、お菓子とお喋りがメインになっている。

溜息は吐かなかった。

まあ、全員が音楽系の進路を目指している訳じゃないんだし、煩く言うのもキヤラじゃない。それに僕がこっちに混じるのなんて、月に二〜三度だ。

今日は、合唱部が音楽室を使っているからってだけだし。

さつと部員全体を見渡す。普段音楽室にこもっているせいか、記憶に無い顔もちらほらある。まあ、今更だけど。部員の比率は女子七割、男子三割くらい。でも、男子に草食系が多いせいか、露骨にアプローチしているヤツは見当たらない。

あちこちに小さなグループを作って、ほのぼのとした雑談が交わされていた。

帰ろうかな、なんて思う。

でも、立ち上がろうとする度に、隣から鋭い視線を向けられる。七海と新部長に横と正面を押さえられているし、さらにその友人二人によって囲まれていた。女子四人に囲まれるなんて、どんな御身分なんだよ、と、自嘲めいたツツコミを心の中に入れる。

「そういえばさ、何でピアノ始めたの？」

ボーっとしていたから聞き逃しそうになったけど、新部長が僕に問いかけていた。自然と四人の視線が、とばけた顔した僕に集まる。だから、こういうのが苦手なんだって。

「幼稚園の頃に、近くにピアノ教室が出来たから」

拗ねてるわけじゃないけど、いつもよりやや硬い表情で僕は答えた。七海と新部長までなら、まだなんとかだけど、その友人二人はまだキャラを掴み切れていない。友人と知り合いの間くらいの距離だから。

「でも、好きなんですよ？」

七海がほぼ決めつけた様子で、僕に同意を求める。

少し間を開けたけど、僕は頷く。

「その理由は？」

重ねて七海が質問する。

「上手く出来たから」

僕は面倒臭さを感じながら、答えた。

「……えっ？ それだけ？」

たった一言で、それ以上何も言わない僕に、ずっとこける真似をした新部長と七海の友人。

「ピアノ以外に得意なの無いの？」

「絵とかも下手じゃないけど、ピアノほどじゃないよな？ 勉強は嫌いだ」

七海の顔を見て、小首を傾げて尋ねる。

「うん、絵は中々だよ。ほら、校内美術コンクールでも銀賞はられてた」

七海は非常に大雑把な手の動きで、多分絵に描いていた内容を目の前の空間に表現した。正直、そのジェスチャーからは、何も伝わらないと思うけど。

でも僕と付き合いの薄い二人の女子は「へえ」と、真顔で言った。すごいな、あれで納得するのか。

「そういえば、シヨパン好きなんだよね。コンクール狙ってる？」
そう右に陣取った大きな眼鏡の女子に聞かれ「いや」と短く否定し、首を横に振った。シヨパンのコンクールはあるけど、そもそも今の僕で受賞できるレベルのコンテストじゃない。

「会話を盛り上げる！」

微妙な会話にいらだったのか、勢いよく立ちあがって頭を掻き乱した新部長が叫んだ。

「どつという話題を、僕に出せと？」

あくまでトーンダウンしたまま、僕は問いかける。

「七海！」

新部長は、すごい剣幕で七海を呼んだ。

「ひゃ、はい！」

びくつと肩を震わせて、七海が返事する。一瞬裏返った声。七海は不安げな表情で、新部長を見ている。

「お前の秘密を、今ここでバラす」

七海の肩を掴んだ部長が、七海を据わった目で見詰めて言った。

「何で！ 何で！ ちよつと、ちよつと、落ち着いてよ！」

七海は大きな目を白黒させ、分りやすいぐらいに動揺して、真っ赤な顔で慌てふためいた。少し気になって、新部長と七海以外の二人の様子をそれとなく窺うと、残念ながら分かっている顔をしていた。

「ほら、こういうの」

七海の様子を満足そうに見た新部長が、今度はごく普通の顔で七海を指差して言った。

「僕、帰って良い？」

げんなりした顔で問いかけると「だ、め！」と、七海が僕の耳に向かって大声で叫んだ。そんな僕と七海を、他の三人が微笑ましい目で見ていた。

そのノリは、部活が終わるまで続き　少し居心地が悪かった。

部活終わりの帰り道で、左右に揺れながら歩く七海。制服のスカートも、肩よりも少し長い髪も、それに合わせて揺れている。こういうのは、割と機嫌がいい時だ。話し下手な僕をいつもの部活動に交えた程度で上向く機嫌だとしたら、ずいぶんと安いと思う。ま

あ、他にも単に部活が好きなのとか、色々上乘せさせられているんだろうけど。

今は昼を少し過ぎたくらいの時間で、日差しは強い。学ランを着ていると、少し暑いくらい。それはブレザーの七海も同じ様で、手の甲で額を拭っている。それでもカッチリと制服を着こなす凛々しい姿は、確かに綺麗……というよりはかっこいい系だけど、一般的に見るなら付き合いたいと思える女の子なんだろうな。

そういうのを考えると、あまり僕にかかずらわらない方が、七海のためになる気もする。

でも、そう考えると少しもやもやする。

ずるい感情だと、我ながら思う。

「そういえば、私もピアノ始めた理由知らない」

唐突に七海が振り返って、僕を見て言った。

大きな瞳が、逃がさないと言っている。

「そっか」

素っ気無く言って、歩くペースを上げる僕。

「ホントの理由、教えて？」

僕の前に立ちふさがった七海が、可愛らしく小首を傾げてみせる。
「ないよ」

僕がそう答えると、七海は頬を膨らませた。

「ある訳ないじゃん。好きに理由を求める方が変だ」

ぶっきらぼうに言った僕と、そんな僕の言葉にはっとした顔をして俯いた七海。

それからしばらくは、会話もなく歩いた。

好きって感情に、理由が必要なら……どれだけ楽だろう。

第七章 彼女にとっての始まりの日

七海について思うところは……恋愛と別のところに置いた場合、結構ある。

なんだか懷かれてしまっってから、この春でもう四年だ。

午前の部活に向かう、眠気混じりの九時の通学路。

斜め後ろを振り返ると、朝から元気な忠犬……もとい、七海の好奇心いっぱいな顔。視線がせわしく辺りを巡るのは、まるで小さな子供の様。今さら好奇心を引くようなものが、二年通った通学路にありはしないだろうに。変化とえば、シャッターが閉まりっぱなしの小さな店が増えたくらいで。

七海に思う最大のところは、やっぱり身長だと思う。中学一年の夏に追い抜きはしたけど、僅か七センチの優越感は結構際どいライオンだ。伸びるのが止まりつつある今はなおさら。悔しいから、一度もそのことで突っ掛ったりはしていないけど、そのコンプレックスに七海も気付いている雰囲気がある。

他には、友人としてみれば一番仲が良い。まあ、狭く浅い僕の交友録では、どの程度の重要性か問われると、答えられないけど。ただ、客観的事実として、一緒に登下校して、休み時間もほとんど毎時間顔を突き合わせ、同じ部活というのは結構誤解される距離だと思う。

実際の心の距離を知っている、僕たち二人以外にはそんな間柄に見えるんだろうな。

小学校五年に進級した四月の終わり、七海が転校してきた。

七海は明るい女の子で、クラスに馴染むのは早かった。

むしろ、一人で本を読んでいたりと、体育館でピアノを弾いたるす
る僕の方がクラスでは浮いていたと思う。自惚れもあると思うけど、
事実として他の同級生より早く大人びていったせいで、自分の思う
ところや感じることに、考えたことを伝えるのを嫌う様になっていつ
た。返ってくる答えに、馬鹿じゃないか？ としか思えなくて。

そんな理由で僕自身が積極的に人と話すタイプじゃなかったから、
七海とは無難なクラスメイトとして話すことしかなかった。授業と
か、掃除当番とか、委員とか、そういうのだけ。

夏になっていく季節の中で、この転校生も背景になっていくんだ
と想っていた。

そんな一学期の終業式の日。嫌がっていても、放って置けなかつ
た小さすぎる事件があった。

長いだけの終業式を終えて、教室で通知表とプリント、夏休みの
友……という名の敵を受け取る。

順番を待ちきれないといったクラスメイトや、もらった通知表を
比べて大騒ぎしているクラスメイトを横目に自分の席へと戻ってい
く。馬鹿騒ぎに加わるのは好きじゃない。サツとクラスを一瞥して、
真ん中の列の最後尾の席に着く……筈だった。教室の一か所、ぽつ
かりと空いた空間を見つけなければ。その場所に誰もいないとかじ
やない。騒ぐ教室の中で、七海の周りの空気だけが違っていた。ま
るで、スポットライトに切り取られたように。

七海が、手元の配布物の束を必死に、泣きそうな顔で見ている。

先生は先生で、一人一人に注意を向けてもいない。特徴的な何人
かを目で追うぐらいで、七海の辛そうな顔に気付いていない。

溜息が漏れた。

幸か不幸か……多分、不運以外の何者でもないんだろうけど、こ
ういうことに僕だけが気づいてしまうということが、良くある。き
つと、冷めたこの性格のせいだ。夏休みが始まる直前の通知表なん
て、はしゃぐのに最適なものが手の中にあるのに、どうにも白けて

しまう。飛び跳ねてみたり、暗くなったりしているクラスメイトの様に素直な振る舞いは出来なかったから。

そもそも、たかが先生が付けた数字が、僕をどうするっていうのさ。

「先生、七海が困ってる」

手を上げて言った僕。

水を打ったように静かになる教室の中で、僕に視線が集まった。盛り上がっているところに水を差された、そんな顔の同級生。また面倒事を、という顔をした担任。

だから、嫌なんだ。こんな目立つのは。

それから、急に七海に視線が注がれる。

向けられた視線に戸惑いながら、僕に視線を向けた七海。僕はそれに気付かないふりをして椅子に座った。

「七海ちゃん、どうしたの？」

わざとらしい猫なで声で、担任の中年女性が七海の肩を抱いて問いかける。

もう大丈夫、か。

そう思っ、七海の周りで騒ぐ連中を後目に、頬杖ついて時計を眺める僕。

興味がなかったから、その後の展開は当然無視したけど、確か、何かの配布物が七海のだけ足りなかったとか、そんな理由だったと思う。

それを、騒ぐ教室で伝えられなかったらしい。

だから、七海が泣きそうになっていた。

結局、大幅に時間を送れて帰りの会が終わった。

ピアノの教室の始まる時間も近かったので、鞆を掴んで教室を飛び出す僕。

一気に下駄箱まで駆け降りた時、シャツの襟を掴まれた。

怪訝な顔で振り返る僕の目の前には、ちよつとイラつく四センチ

上から目線の七海。

「ありがとう」

七海は、最初困ったような顔をして、それからはいかに言った。

確か、この時の僕は「ああ」とか言っただけで、また駆け出したと思う。

ピアノを弾くのは、割と好きだったから、ピアノの教室の時間を気にしていたんだけど、可愛げのない反応だったのは認める。

そういうのも含めて、お世辞にも話しやすいタイプじゃないと思う、僕は。

なのに、この一件を切っ掛けに七海がアクティブに絡んでくるようになった。

夏休み中の学校のプールの開放日とか、ラジオ体操とか。出なくても罰則がないから、適当にサボっていた細々した行事や宿題を付き合わされた。

それが楽しいか否かを聞かれれば……微妙。

七海が居て良かったなと思う時もあるけど、また面倒事を起こしちゃうと思う時が多いせいだ。

それは、きっと今も。

色々と思いだしていたから、ボーっと歩いていたら、七海が微妙に手の甲同士をぶつけて隣に並ぶ。僕と顔を合わせようとしなくて、少し不貞な様な表情。

もしかしくなくても、七海の呼び掛けに気付かなかったのかもしれない。考え事に没頭すると周りが見えないのは、悪い癖だ。

もっとも、だからといってこんな風に拗ねるのもなんだかな、と思って、七海の背中をパシンと叩き、歩くスピードを上げて七海を引き離れた。

すると、七海も歩くペースを速めて横に並び、肘で僕を軽く突く。

もしかすると、手を繋ぎたかったんじゃないかと思う。
でも、僕が七海に望んでいるのは、きっと少し前 明確な友人
としての距離なんだ……。

最終章 小さな卒業

春休みの最後の日、七海は音楽室まで付いてきた。
来るべき日がついに来たか、と、僕は思う。

微かに目を伏せた神妙な面持ち、睫が微かに揺れている。

七海は、不器用だ。だから、これが二人の分水嶺になると感じた。
かつて僕が朋美先輩に願ったように、七海も全てに決着がついた後
で友達に戻るつもりはないんだろう。

僕は七海の不安に気付かないふりをした。

多分、七海もそれで良いと思っっている。

この時は、まだ。

入口に一番近い机に鞆を放って、それから学ランも脱いでワイシ
ヤツになってピアノの前に座る。いずれにせよ、何かを失くすなら、
一つ試してみよう。弾こうと決めたのは、一番苦手な曲。微かに笑
みが漏れて、それから表情の全部を消して、尊崇するピアノの詩人
の肖像をさっと見てから鍵盤に視線を落とした。

運命の女神様、一つ賭けでもしましょうか？

中央二列目の席に、七海が座る。椅子を引く音が残響を残して消
え、俯いていた七海が顔を上げて僕を見た。射抜くように、強い眼
差しで。

それを合図に、僕は指を鍵盤に落とした。

やさしく、でも、力強く。

これまで一度も完璧に弾けなかったこの曲に、今の僕の全部を掛
ける。

鍵盤の一つが一つの音になって、指が触れる音が重なり合い流れ
だす。

メロディーが、紡がれる。

最後の音が、寂しげに大気を揺らし……消えていく。
指が震えて、胸が熱かった。

その余韻さえも消えた後に、七海が拍手をした。

「上手いね」

七海が、柔らかく笑う。

「そうでもない。難しいのは、まだやっぱりダメだね。譜面通りに弾けただけ」

両手をひらひらとさせて、軽く舌を出して言った僕。

そんな僕を見て、七海は少し寂しそうに笑った。

「また、シヨパン？」

「そう、好きなんだ」

前に七海に言った時の状況をなぞるように、僕は答える。

今日の七海も、盛大に顔を赤くして、あからさまな挙動不審を見せた。

いや、今日だからこそなのかもしれない。七海にとっては。

「前にも言ったよね」

そう言って、微笑みかける僕。

わざとらしく頬を膨らませて見せた七海。

ほんの少し、沈黙が流れた。

僕達の間を優しく撫でるように、時間が通り過ぎる。

前触れ無く七海が立ち上がって、誰も座っていない席の間をまっすぐに向かってくる。もどかしいくらい足の足並みで。軽くとじられた唇は、沈黙を守っていた。重なったままの視線が、瞳の奥に隠された意志の強さだと思った。

僕はピアノの前に座ったまま、七海を待つ。

「あのね、アタシね……」

僕の横に立って、やっと口を開いた七海。途切れた言葉に横を見ると、頼り無さそうな、不安を隠しきれない七海がいた。その想い

の、気持ちの輪郭が見えたから、七海の口元を人差し指でふさぐ。

「今じゃない」

やんわりと首を振った僕に、七海は顔を歪めた。

それを叱るように、立ち上がって、両手で七海の頬をパシンと軽く挟んで顔を背けられないようにする。

そういう意味じゃない、声に出さないけれど、七海にそれが伝わった気配があつた。

運命の女神様、ピアノの詩人様、賭けは僕の勝ちですよ。

「今じゃ、ないんだ」

もう一度、僕は告げる。

小さな賭けの勝利を、一つの恋の終わりを、これから始まる……可能性を。

五センチの距離が、僕と七海の間にある。全部が伝わったか不明だけど、一応の納得をした七海の表情が。

僕の手を払い、七海が額を僕の額にこつんとぶつける。

鼻が微かに触れた。

今、間に横たわるのは三センチ。

「こんな悪人に、惚れたお前が悪いんだ」

七海が身動きをするのを感じて、わざと意地悪に、ぶつきらばうに言った僕。

「惚れてなんかない！」

むきになった七海が、そう反論する。

「それなら良かった」

小さく笑って言った僕を、不満そうに睨む七海。

そんな表情もなんだか可笑しくて、滅多に無いくらいの笑い上戸になった僕は、ついに吹き出した。

そして、そんな僕を見て最初驚いた顔をした七海だったけど、それから照れて怒ったような顔になって、最後は呆れたように笑った。

もしかしたら朋美先輩も、僕が七海を見るような気持ちで見えていたんじゃないかなって気がした。

始まりと終わりというなら、そんな大層な何かがあったわけじゃない。

誰のどの感情もずっと以前からそこにあっただし、今劇的に変わったものも無い。

ただ、幕間が終わって、タクトがもう一度振り上げられただけ。

それは、一人の先輩の卒業を端にした想いの顛末と、二人にも訪れた小さな卒業。

f i n

最終章 小さな卒業（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こちらの作品は、ずっと昔に第一章のみの構成で同じタイトル『少しの卒業』として掲載させて頂いたものを、加筆し再度投稿させて頂いたものです。

執筆談と致しましては、最後の最後まで七海には悩まされました。

一昨日までは、七海がふられて終わる予定でした。

それはもう、完膚無く。

ですが、加筆している内に、七海のキャラ立ちや主人公の立ち位置（七海が一方的に惚れていて、それをそこはかとなく伝えている部分の話で、主人公が自惚れ過ぎの嫌なやつにならないようにとかなり苦心しました。その甲斐は……あることを願うばかりですが）を再度考察すると、主人公と七海の関係や、主人公の好きだけど諦めに近い朋美への感情等を熟慮し、最終話を書きなおしての完結と致しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243q/>

少しの卒業

2011年6月26日20時27分発行